

元白浜ケンイチは、（平
穩に）白浜ケンイチを
見守りたい

turara

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生した白浜ケンイチは、山田太郎として生を受けた。彼は、再び人生を歩み出すことになるのだが、そこは、かつて自分の歩んだ世界と同じ世界だった。同級生には過去の自分、白浜ケンイチはいるし、悪友の新島春男、さらに風林寺美羽も存在し、良くも悪くも過去と同じようにストーリーは進んでいく。

彼は、自分はいくまで、見守り役に徹すると思いつつも、なんだか少し寂しい気持ちである。自分にあつたものを全て白浜ケンイチにとられてしまうような。

目次

プロローグ	1
少女A	4
懐かしさ	7
少女Aの事情	11
劣勢	17
梁山泊	25
ジュナザード	31
YOMI	40
本郷	46
叶翔	54
面倒事	61
風林寺美羽	67

プロローグ

元、白浜ケンイチこと、山田太郎は一人教室の隅で細々と過ごしていた。彼の前世は、戦いの人生であったと言っている。高校生の時、運悪くあの少女に出会ってから、崖から転げ落ちるように修羅の道へ進んでいった。

別に文句があると言っているわけではない。戦いは好きではなかったが、大切な人を守るために戦っていると思えば苦ではなかった。それにあの少女、風林寺美羽のことは生涯ずっと愛する人となったわけだし、大切な愛娘も生まれた。

しかし、また再び生をうけるだなんて、流石にそれはひどいと思わないか。それも、白浜ケンイチではなく山田太郎である。

それでは、白浜ケンイチは誰なのかというと、これもまた白浜ケンイチなのである。つまり、過去の俺と、同級生であるということだ。

恥ずかしくて見ていられるわけがない。

俺にこんな時代があったことを娘に知られれでもしたら発狂するだろう。しかし、ともかく、どんな恥ずかしかったとしても昔の自分である。苛められ、パシられている俺を見殺しにできるほど、自分が嫌いなわけではない。

白浜ケンイチを助けるにあたって重要なことは、自分が目立たないと言うことである。戦いのプロからしてみれば、修羅の道へ落ちるのは本当にあつという間だ。

例えば、ここで絡まれている白浜ケンイチを助けたとする。すると、やられた輩はどうするだろうか？

簡単だ。さらに強い奴に報告するのである。

これは悪夢の始まりである。倒して、倒して、倒せば倒すほどさらに強い奴、強い奴が自分の元へ現れる。こうした悪夢の連鎖は、か弱かった俺を戦いの道へ進ませたのだ。

俺は、かなり迷った。どうすれば白浜ケンイチを助けることができるのか？

そしてさらに深刻な問題は、倒せば倒すほど、強い奴が現れるのと同様に、弱い奴にも、必ずと言っていいほどいじめめる奴が現れるのだ。俺がどれだけいじめつ子を追っ払おうとしても、白浜ケンイチ自身が変わらなければそれは変わらないということだ。

俺は、過去の自分、白浜ケンイチに戦いの道へ進ませたいかと聞かれれば、noと答えるだろう。自分のこれまでの人生を振り返り、また同じ地獄の人生を繰り返したいかと言われると無理と思うからだ。

俺は、白浜ケンイチではない。しかし、彼は他人ではなく、もう一人の自分なのだ。

彼が、行く末を見守り、少し手助けする事ぐらいはしようと思う。

と言うわけで、このくらいのかつあげを助けることはしないことにしよう。これも、彼にとって重要なことかもしれない。と思うことにする。

少女A

前の俺が戦いの道へと進むことになった、あの少女との出会いの前に、俺のほうが先に、人生の転機を迎えてしまったようだ。

というのも俺は今、闇への勧誘を受け逃げ回っているところだ。目立たないふうの生活を目指していた俺がどうしてこんなことになったのか。それは、一週間前にさかのぼる。

あれは、好きな作家の本を発売日に購入し、うきうき気分で自宅に帰っていたときのことだった。

「やっと新作が出たよ。どれだけ待ち望んだことか！」

俺は、上気分で購入した榊原先生の作品を大事そうに抱えた。なんとたつて一年待っていたのだ。この本の上が発売されてから、続きが気になってしょうがなく、毎日そわそわした気持ちで過ごしていた。

飛び跳ねそうな勢いで、早く読みたいと家へ急いでいると、後ろから小さい気配を感じた。

俺は、後ろのシャツをくんと引かれて立ち止まった。

「お兄ちゃん。助けて！」

そう俺に助けを求めてきたのは、一般人とは思えない異様な雰囲気を持つ少女だった。真つ白い肌、白い髪の毛。目は薄い青色をしており、白いTシャツにサンダルを履いていた。

どう考えても訳ありの少女である。誰かにねらわれているのだろうか。

俺の長年戦いの中、研ぎ澄まされたピンチ回避能力は、この少女に警告音をならしているようだった。

とにかくいやな予感がする。

俺は、この少女に事情を聞くより先に、この少女を担ぎ込み一目散に逃げ出した。

いやな予感がするからといって放っておけるわけではない。それに、この少女が逃げているということから、敵もそんなに離れてはいないだろう。

また、彼こと山田太郎は、こうみえても達人である。その彼が、いやな予感を感じるとういうことは恐らく、相手も自分と同じ、それか自分以上の敵であることが予想できる。

「あー。もつと鍛えとくんだったな。ちよつとやばいかも。」

山田太郎は、白浜ケンイチだった頃に比べて格段に弱くなっている。それはそうだろう。彼の前世は、戦いの連続で鍛え上げられてきた強靱な肉体があった。また、戦いの

中でしか生まれない、武術の勘である。

山田太郎は、今世こそ平和にいきたいと願い、そう過ごすことに成功していた。昔のように敵がいるわけではなく、襲ってくることもない。白浜ケンイチに比べて弱いことは必然だった。

それでも一応は、達人クラス。達人に至るための気の掌握を会得しているため達人とはいえるものの、肉体的にかなりきついものがある。

「やだなー。久々だよこの感覚。命の危険が迫ってくる感じ。」

山田太郎は、全速力で駆け抜けながらため息をついた。

懐かしさ

俺は、新島流の逃げ足で痕跡を完璧に断ちながら隠れ家へ急いだ。どれだけ一般人とはいえ、隠れ家は用意しとくものだ。いざ、何かあつたときとりあえず避難できる場所は確保しておいた方がいい。

山田太郎は、自動車の上を飛び越え走りながら、自宅とは逆方向へ進んでいく。ここで大事なのが痕跡を残さないことは前提条件だが、目撃者を最小限にとどめることも大事である。それは人間に限つた話ではない。むちやくちやな話だが、達人にもなると、その辺に飛ぶ鳥が目撃情報になることもある。さらに言うところ、こちらがどれだけ頑張つても、怪しい中国のまじないで場所を一瞬で当てられることもある。

太郎は、むちやくちやだつた梁山泊の師匠を思い出しながら静かに苦笑した。まさに規格外の強さと言つてもいい。

(懐かしいな。)

太郎は、この世に生を受けたときからずっと考えていた。俺が梁山泊の師匠に会いに行つていいのかどうか。もちろん、太郎はすぐにでも師匠の元へ会いに行きたかつたし、できればまた、師匠の弟子として梁山泊と関わりたいと思つていた。

白浜ケンイチが、どれだけ強くなるうとも、ケンイチの師匠は生涯あの人たちだったし、そのことは、ケンイチにとっても大事なことだった。

太郎が、今まで梁山泊に関わらなかつたのも、その強い思いが原因なのかもしれない。太郎は、これまで戦いという火種から逃げ続けてきた。もし一度でも、その場に踏み入れてしまえばまた再び戦いの世界に落ちていつてしまうだろう。一人を助けると、もう一人を見捨てることができない。太郎は、そうやって自分の中で均衡を保つてきたのだ。

太郎は、白浜ケンイチとして大切なものを数多く守ってきたが、その分失うこともあつた。それは、生きていて当たり前的事だが、強くなると、否応もなくどちらかの選択をせまられることもある。これならいつそ、どちらも守れないというほうがましだと思ふことがあつた。

「命の選択」強くなればこそその問題だった。どちらも助けられればいいが、そうでないときも勿論ある。それは、白浜ケンイチを最も傷つける要因でもあつた。

数多くの犠牲を防ぐため、最小限の人を犠牲にする。それは本当に正しいことなのか。分からないまま、そして、それを実行するのは白浜ケンイチ自身である。

過去、白浜ケンイチはその悩みを、妻の風林寺美羽に打ち明けてはいたが、やはり解

決することもなく、彼の生涯をむしばみ続けた。どれだけ強くなるうとも、どうしようもないことは存在する。

太郎は疲れていた。見捨てられない。そんな優しさを持つているからこそ救えなかつたときの後悔は大きいものだった。

確かに、ケンイチは生涯で守れたもののほうが多いだろう。しかし、もし自分が戦いとは無縁の世界で生きていたら。と考えることも無いわけではなかつた。自分が守れなかつた人が生きている未来があつたかもしれない。ケンイチはそう思わずにいられない日はなかつた。

太郎が今世、戦いの道へ踏み込めない大きな理由がそれであつた。

(こんな自分で、会いに行けないよな。)

太郎は、師匠にこんな自分を見られたくなかつた。白浜ケンイチは梁山泊の一番弟子として、正義のために戦う存在だった。どれだけひどい状況でも、自分の信念に真っ直ぐで、全力で立ち向かつていける。それが、弟子としての誇りだった。

太郎は、これから戦いの道へと進む白浜ケンイチを見ることになるだろう。太郎は、その事を止めはしないが、つらい道だということを重々承知している。太郎は、その戦いの道から逃げてしまったのだ。

それでも、この先大事な仲間と出会い、大切な師匠と出会い生きていく白浜ケンイチを羨まずにはいられなかった。

俺も山田太郎ではなく、梁山泊の一番弟子、白浜ケンイチとして生まれていたら、もう一度、戦いの道へ進めたのだろうか。

少女Aの事情

複雑な路地を越え、森を走り、30分ぐらい走ると太郎の隠れ家が見えてきた。

少女は、俺の走るスピードに目を回しながら必死に掴まっている。

「もう着いたから。」

太郎は巧妙に隠された地下扉を開け中へはいる。かなり広い空間で、そこには質素な机やいす、食料、最低限度の生活ができるものがおいてあった。

太郎は、少女を優しく腕からおろした。少女はヨタヨタと一瞬回ったが、気を取り直したように太郎に向き直った。

「助けてくれてありがとうございます。私は、シタツタ国に住むターラナと申します。」

少女は、太郎に丁寧にお辞儀した。その挨拶のしかたから、ある程度の身分の子であることが分かった。

太郎は、この少女が自分を頼ってきたことから、何か特殊な能力があるのではないかと疑っていた。何故、他ではなく、見るからに弱そうな俺を頼ってきたのか。

「俺は山田太郎。突然で悪いけど、何があったか説明してもらえるかな？」

太郎は、少女をいすへ座るよう促した。そしてペットボトルのお茶を出す。

本当は、もつと落ち着いた状況で聞き出せばいいのだろうけど、ここが見つかるのも時間の問題だろう。早く事情を聞き出すのに越したことはない。

少女は、一口お茶を飲み息を落ち着けると、改めて彼女自身のことを話し出した。

「私は、シタツタ国で生まれました。シタツタ国は小さな国で、土に恵まれていたことから畑を耕し、自給自足で生活しているような所です。」

太郎は、聞いたことのない国だと思った。太郎は、白浜ケンイチだったころ、いろいろな国を回っていたこともあったので、知らない国があることに驚いた。もしかしたら、すぐになくなってしまう国なのかもしれない。

「問題が起きたのは、その国に私というやつかいな存在が生まれてしまったことです。」

少女は、淡々とそう話す。

「一般的な家庭に生まれた私は、普通の人とは違う特殊な能力を持っていました。」

「能力？」

「はい。私は、未来が見通せる力があります。」

少女は太郎と向き合い目を合わせた。少女の瞳が青くひかる。

太郎は、なるほどなどと思う。少女がここまで逃げ延びられてきたのもこの能力があったからだろう。

「私のこの能力は、家族の間で秘匿にされ、私も、この容姿でからかわれることもありましたが、何の問題も起こりませんでした。」

「しかし、何らかの問題が発生して、私のこの能力が悪い奴らに知れ渡ってしまったのです。」

「それが、つい数週間前のことです。私は、ワルイ奴らに狙われ連れ去られる未来をみました。」

少女は、少しふるえているようだった。膝の上で強く拳を握りしめている。

「私が見通せる未来は一週間先の未来です。準備するには何もかも特に時間が足りませんでした。」

「国からであるには入国審査が必要なんです。けれど、そこはワルイ奴が潜んでいるのは誰が考えても分かることです。だから、秘密裏に運ばれる荷物に紛れて国をわたったんです。」

「けれど、それには大量のお金が必要でした。命がけで亡命するのですから大金を積まないと乗せてもらえません。」

少女は、そこで家族と別れ、一人で国をわたり、未来を見通せる力を頼りにここまでやってきたらしかった。

「それで俺を頼っている未来が見えたとか？」

「その通りです。」

少女は静かにうなずく。最後の頼みの綱として俺を頼ってきたんだろう。力になってあげないわけにはいかなかった。

「敵は、どんな奴で、どのくらいいるか分かる？」

俺は、ここ少女の話を聞くに当たり、ずつといやな予感は消えていなかった。大したことのない奴らだといいが、もし、闇という組織のようなでかい力が動いているのであれば恐らく俺にはどうしようもない。

しかし、俺の予感是最悪レベルの警告をならしていた。

「わかりません。ただ、シラットという拳法を使っていることはわかりました。私の方でもよく使われる拳法なんです。」

少女はそう静かに言った。

「シラット」それは、太郎がよく知る拳法だ。かつて自分の妻、美羽が闇に落ちかけるきっかけとなったもの。

太郎は、「シラット」という言葉を聞いたった一人の最悪な相手を思い浮かべた。闇の中でもトップレベルで危ない奴。

シルクアット・ジュナザード

一影九拳最古参の一人で闇のメンバーの中でも最悪なレベルの強さを誇る使い手である。

太郎は、自分が思っていた数倍やばい敵に目が回りそうになった。

(俺が今勝てるのは年齢ぐらいかもしれない。)

白浜ケンイチだったころならなんとかできたかもしれないが、今の自分では足止めすることで精一杯だろう。

というか、彼が相手ならここももうばれているかもしれない。

太郎は久々の絶望を感じ、戦いの準備を備え始めた。

「ターラナちゃんっていうんだっけ？」

「はい。」

俺は、覚悟を決め立ち上がる。恐らく、この子を無事に梁山泊まで届けることが自分のできる精一杯のことだろう。

「外にでたら、梁山泊つてところまで行くといいよ。俺より強い人が多分君を守ってくれるだろうから。」

太郎は、梁山泊までの道のりを簡単に書く。

「出来たら、梁山泊まで送って行ってあげたいけれど、念のため。もし、敵に見つかったら、ひとりでそこまで行って助けを求めて。出来るだけ君が無事にたどり着けるまで

時間を稼ぐから。」

少女は、太郎が書いた地図を受け取るとそれを強く握りしめる。少女は、ただならぬいやな予感を感じ取ったのか震えていた。

俺は、少女を担ぐと、梁山泊に向けて全速力で走り出した。

劣勢

追いかけていたのは良くも悪くも彼一人のようだ。彼の行動についていける部下などいないからなのかもしれない。

しかし、これは好都合である。俺がこいつを引き留めている間は、この少女を逃がしてあげられる。

シルクアット・ジュナザードはヘリからやってきた。ババババという音を立て、怪しげな黒い仮面。そして、片手にリングをもち、齧りながら空から降ってくる。

俺は、後ろへ少女を庇うと、背中を強く押す。

「俺が言ったとおりの場所に行ければ、必ず助かるから。」

梁山泊までかなり近づいたが、やはりまだ少し遠い。せめて15分ぐらいはこいつの相手をしないといけないみたいだ。

俺は、少女に梁山泊へ向かうよう指示を出す。しかし、少女は俺を置いていけないと思ったのか、もたもたしていた。

「助けをよんできて。早く呼んできてくれたら、俺も助かる。」

そう俺が少女に諭すと、少女は理解したのか、すぐさま走り出した。

俺は少女が走り去っていくのを確認した後、目の前の敵、シルクアット・ジュナザードに向かい合った。彼は、彼女が去っていくよりも、俺のほうに興味を示したのか、追いかけていく様子はなく、俺のほうをのんびり観察している。

「カツカツカ。ずいぶんおもしろそうな若者じやのう。」

太郎は、すぐに心を落ち着け、静の気を整える。

「その年で、気の扱いに関してはマスタークラスか。」

少しずつ進んでくるジュナザードに、太郎は一挙一動に集中した。

体力も筋力も何もかも恐らく敵わないだろう。前世で得意とした、何百もの技も今の太郎の身体能力では繰り出すことも不可能。自分の身体を犠牲にし最後の捨て身の攻撃になるだろう。

太郎が唯一できることと言えば、前世で培われた圧倒的な武術への経験、そして相手の心を読む流水制空圏で相手の攻撃をかわし続け、少女が逃げられる時間を少しでも長くすることだ。

ジュナザードは、良くも悪くも俺という存在に興味を持っている。恐らく、すぐに殺してこようとしてくるわけではない。

彼は、前世でもシラットを継承する弟子を育成することに餓えていた。以前、美羽をさらったのも弟子にするつもりであつたし、いく人もの弟子を殺し合いさせ、シラット

を継承するものを探していた。

俺は、武術の才能が全くないわけだが、この年で達人クラスに達しているのは俺ぐらいだろう。興味を持たないはずもなかった。

じりじりと二人の間に重い空気が流れる。

先に動き出したのはジュナザードほうだった。

「地転蹴り（トウンダンアン・グリーンタナ）!!!」

太郎は、一瞬ともいえる時間のあいだに繰り出された重い蹴りを流水制空圏を使いすんでのところではける。ビリビリとした蹴り圧が頬を掠める。太郎は、目を細めた。

恐らく、まともに受けていたら内臓がやられていたかもしれない。

太郎は、ひさびさの戦闘に体をふるわせた。一瞬一瞬の攻防戦。すんでのところでは続ける途方もない精神力。

太郎は、これが武術だ。と徐々に体で実感した。長らく忘れていた感覚である。

ジュナザードは、はじめの攻撃をかわきりに、縦横無尽の連続攻撃を仕掛けてきた。

シラットは、変則的な組技の応酬。隙のない縦横無尽な攻撃によって形作られる。組

技一つ一つに命を刈り取るような急所の攻撃が連続で繰り出される。

一つでも対応を誤れば、太郎は即死するだろう。

「木上落とし!!!」

ジュナザードの縦からの攻撃が太郎を襲う。太郎は、それを両手で受ける。重い突きに太郎は思わず「くっ」という声を漏らした。太郎の鍛えていない足腰がジュナザードの攻撃に耐えられるはずもなく、痛々しげに悲鳴を上げる。

しかし、太郎も避けてばかりはいられない。うまく力を殺し、受けきるしかない。

「ほう。これに耐えるか。」

ジュナザードは、太郎を試すようにありとあらゆる技を繰り出していく。

太郎から距離をとり、一気に加速したかと思えば太郎のこめかみをめがけて掌底がうたれる。

太郎はそれを完璧に受け流し、その力を使いジュナザードの懐へ入り込む。

致命傷になり得るいくつもの技を受け流していく中で、太郎は少しずつ戦いの勘を取り戻していくのを感じていた。

ビリビリとぶつかり合う殺気と攻撃。太郎は、白浜ケンイチだったころの集中力、精神力が最大まで高まっていた。

「ここまでわしの攻撃をすんで避け続けるとは、なかなかの精神力じゃの。」

いくせんも太郎とジュナザードと視線が絡み合い、どちらも相手の思考のさらに上をいこうとする高レベルの戦いになっていた。

そういう戦いにおいて、太郎はジュナザードよりも一步先をいつていた。これまでの武術の経験から、相手の呼吸を読み、次に繰り出されるであろう技を予測することは、太郎の得意分野であった。

遙かに劣る、肉体的、身体的能力を相手の呼吸を読み切ることで避け続ける。

しかし、この戦い方ほど精神力、集中力が要求されるものはない。圧倒的に太郎が不利な状況だった。

「しかし、惜しいのう。ここまで静の技を極めていながら全く体がついていつておらぬ。」

ジュナザードは太郎の弱みを的確に見抜いていた。

太郎はジュナザードからの攻撃をすんでで避け続けているものの、ジュナザードへの攻撃は全くと言っていいほど届いてはいなかった。

まさにじり貧の状態である。

このまま避け続けても勝つ見込みは全くなく、太郎の方が先に体力的限界が来て、ジュナザードの技をまともに受けてしまうだろう。

しかし、太郎はもとより勝つということを前提とはしていない。少女を逃がすための

時間稼ぎである。ジュナザードが太郎に興味を持ち、こうやって戦っていること自体、太郎にとっては思惑通りのことだった。

無理に捨て身の攻撃に入る必要はない。倒す必要はないのだ。少女が無事にたどり着けば、恐らく数分もしないうちに梁山泊の人がここへ助けに来るだろう。そうなつてはジュナザードもいったん引くしかない。

太郎は、怪物的な精神力でジュナザードの攻撃をかわし続けた。

しかし、ここで太郎が誤算だったのは、ジュナザードも太郎の思考に気がついていたということだ。ジュナザードは、太郎の戦い方からある男の姿を思い浮かべていた。

長老である。元、梁山泊の弟子として指導を受けていた太郎。いくら年月がたち、自己流の技を身につけようとも長老をよく知るジュナザードには染み込んだ根底にあるものは隠しきれないようだった。

太郎と梁山泊にはつながりがある。そう分かってしまえば、あの少女を向かわせた先は自然と分かるものだ。

「そろそろ潮時かの。」

ジュナザードは、これまでとは打って変わりシラットの奥義の一つ、ハントワッセルドワン プリンセス「転げ回る幽鬼」を繰り出した。

ジュナザードは太郎を生かして連れて帰ることを諦めたのか、確実に太郎をしとめにかかった。これを受けて生きて帰れるものはいない。ジュナザードは太郎がこれを受け生きていればラッキー、死ねばそれまでという最終的思考に入ったのだろう。

「転げ回る幽鬼」はシラットの奥義の一つ。相手のかわす道全て無くした究極の奥義。太郎は、これまで身体的能力の理由から柔術を中心に受け流してきた。しかし、もうそれだけの技ではこの奥義を防ぐことはできない。太郎は、せめて致命傷だけは避けようと、これまで身体的な理由で封じてきた技の一つを繰り出した。

恐らくこの奥義からは抜けられても、体がついていかず、自滅してしまうだろう。それでも、即死するよりはましである。

太郎は、自分の中のリミッターをはずした。

梁山泊

「どんどんどん。」

梁山泊では、門の前で誰かが門をたたいている音が聞こえた。かなり焦っているようで、非力な一般人が精一杯叩いているような小さい音だった。

「ん？客人かな。」

秋雨は、読んでいた新聞から目を離し門のほうへ目を向ける。

「随分幼い子のようね。足取りが短いね。」

馬がそう言うと、アパチャイは嬉しそうに飛び出していた。

梁山泊の門はとてつもなく重い。一般人に到底開けられるような代物ではないかった。

「それにしても珍しい客人ね。」

「ふむ。アパチャイが怖がらせないといいが・・・。」

アパチャイが門の上から重い扉を開ける。しかし、客人はアパチャイに全く気にもとめず、門が開いてすぐ中に飛び込んでいった。

少女が着いたのは、あの青年、山田太郎と分かれてから10分後の事だった。

少女はあの青年に頼ってしまったことをとても後悔していた。

少女の目には涙が溢れている。少女は、自分が逃げることに精一杯だったが、本当は自分が捕まってしまうえばよかったのではないかと激しい自己嫌悪に陥っていた。

あの青年は自分を犠牲にしても私を逃がそうとしてくれた。

今まで、自分が捕まれば悪い奴らに利用されもつと多くの人が傷つくと言われ、人に頼ることを当たり前と思うようになってしまっていた。

しかし、少女は改めて、本当に青年が犠牲になつても自分が助かる事に意味があるのかと思うようになっていた。

「誰かいませんかー!」

少女は、わき目もふらずそう大声で叫ぶ。息も切れ切れの中、少女はそう叫びながら、この家の住人を探す。

梁山泊の誰もがその声の必死さを聞き、少女にとって今、緊迫している状態だと言うことに気がついた。

秋雨は、すぐに立ち上がり、少女の元へ向かう。

少女は中庭にいた。誰かを探し走っているようだ。少女は今にも倒れそうなくらい衰弱していた。恐らく、自分の体力の限界を超えて、ここまで全力で走ってきたことが窺える。

秋雨は、その少女の身に何かあったのだろうとすぐに察した。そして、その特殊な容姿から、ある程度の事は予想がついた。

「どうしたのかね。」

秋雨は、そう少女に向かって問う。

すると少女は、涙を流しながら、秋雨に助けを求めた。

「助けてください！お兄ちゃんが死んじゃう！」

少女は嗚咽を漏らし、そう必死に訴える。その必死さから、どれほど事態が深刻かが窺えた。秋雨は、人命がかかっているということを知り、急いで彼女から事情を聞き出す。

「まあ、落ち着きたまえ。そのお兄ちゃんというのは今どこに？」

梁山泊にいた、馬、アパチャイも少女のもとへ近寄る。

「なんだ？このちっせえの。」

庭で巻き藁を叩いていた逆鬼も、近寄ってくる。

「今、この場所で戦ってる。早くいかないと殺されちゃう！」

少女は、ケンイチに書いてもらった地図上を指差す。

「分かった。詳しい事情は後で聞こう。」

秋雨は、涙であふれる少女に向かって優しく頭を撫でる。

「後は任せておきなさい。必ず助けますよ。」

秋雨はそう言うと、すぐに駆け出し青年の救助へ向かう。続く逆鬼も、秋雨の後に続いて飛びだしていった。

秋雨も、逆鬼も思った以上に事態は深刻ではないかと思っていた。彼女の容姿から察するに、恐らく狙っているのは、普通の者ではない。彼女を敵から逃がし、そしてこの梁山泊の場所を伝えたものは相当な実力者だろう。そして、その者が少女を一人逃がしてまで、戦わなければならない相手となれば、それは恐らく、我々のような武術を極めた達人。

「おい、秋雨。どう思うっ？」

二人は全速力で車の上を走り駆けていく。

「……詳しいことはわからん。」

逆鬼は、頭をかきむしる。

「なんかさつきから嫌な予感がしてるぜ。相当やばい相手かもな。」

秋雨も黙ってうなづく。

少女が指し示した場所まで、二人はあつという間に着いてしまった。しかし、二人はそこでもう手遅れだったことに気づく。

周辺は、かなり激しい戦闘があったことがわかる。あちらこちらに壊れたアスファルトの後や、焼けた残骸。戦闘の中心となったであろう場所では、前の建造物が跡形もなく消え去り、空虚な空間が広がっている。

「くそ。一足遅かったみたいだな。」

秋雨も逆鬼も、残された跡から行われた戦闘の激しさを悟る。しかし、幸いなことは青年の死体がないと言うことだ。

「恐らく少女の言う青年は生きているだろう。」

逆鬼もそれに同意する。

「ああ、その可能性が高いな。」

「にしても、両方ともかなりの使い手だな。」

秋雨もそれにうなずく。だからこそ、秋雨は、その青年が連れ去られた可能性が高いと思っていた。もし、あの少女の敵が闇の者だとすると、青年も闇へと勧誘された可能性がある。

「少女から詳しく話を聞く必要がありそうだ。」

ジユナザード

ジユナザードは、黒い仮面をはずす。隣にあった机にからんという音がなる。

仮面の中からは、彼の年とは思えないほどの美形の青年の顔が現れた。中性的な顔立ちに美しい銀髪をなびかせる。先ほどの戦いをしていたものとは到底思えない顔立ちだった。

彼は上機嫌に、自分の腕につけられた傷を撫でる。二の腕には、傷つけられた10cmほどの浅い傷があった。

「かっかっかっ。」

彼は、その傷を掴み満足げに笑う。

「たまには、外へおもむいてみるものじゃのう。」

10cmの傷。それは山田太郎がつけた傷であった。

ジュナザードは、太郎に対し、ある意味本気で戦ってはいなかった。むしろ、太郎との戦いに楽しさを見いだしていた。

この年で信じられないほど極められた美しい「静」の気。これほどまで完璧に練られた気をジュナザードもほとんど見たことがなかった。

彼は、太郎との戦いの中で、湧き上がる喜びを隠せないでいた。

強い者と戦う喜び。それは、武術家である限り誰もが持つ感情である。しかし、自身が強くなればなるほど、その喜びと出会えることは少なくなってくる。

ジュナザードのようなレベルまで来るとそれが顕著に現れていた。自身の喉の渴きを潤すような刺激を追い求め、彼は強者を渴望していた。

太郎は、武術家として足りない部分が多すぎる程あったわけだが、それを超越するほどの気の扱いに長けていた。

ジュナザードは、見たことのないほど美しい静の気に目を奪われる。

ジュナザードは、彼の土俵に上がり、自分の攻撃がかわされることを楽しんでいた。

どこまでこの静の気の運用だけで通用するのだろうか。

ジュナザードは、冷静で静かに技を受け流していく太郎に致命傷となり得るえげつない技をどンドン繰り出す。

ジュナザードは、それを避けられるたびに、太郎の美しい静の気に魅せられた。

「美しいのう。」

ジュナザードは、太郎の身体能力を向上させたらどうなるのかと思う。どこもかしこも武術家として足りないところだらけの太郎に、自分が基礎を教えたらどうなるだろうか。

ジュナザードは想像しただけで喜びで体が震えた。

ジュナザードは、これまで自分の後継者にふさわしい弟子を探し求めてきた。一国を支配し、強さを与え、国民を戦いあわせた。生き残った者同士で殺し合いをさせ、最強の弟子を作ろうとした。

しかしどれも失敗に終わる。誰も彼も、彼の理想についていけないものはいなかった。

しかし、この青年はどうだろう。彼なら限りなくジュナザードの理想に近い後継者にまで成長させることが出来るかもしれない。

ジュナザードは、戦いの中で太郎が欲しいと強く感じていた。

しかし、ジュナザードもこの戦いが限りのあるものだとは分かっていた。本当は、もつと色々な技を試してみたい所だったが、もうそろそろ追っ手が来てもおかしくない頃である。

ジュナザードの本当の目的はあの少女であつたが、今では完全に太郎へと変わつていた。

「そろそろ決着をつけねばならぬな。」

ジュナザードは、この青年をどうしとめようかと吟味する。

ジュナザードは、本能的に彼の奥義である「転げ回る幽鬼」を彼に試してみたいと思ひ始めていた。太郎はジュナザードが思った以上の使い手であつた。しかし、流石にこの技は耐えられないのではないかと思う。

しかし、彼は思い直す。自分が、特定の誰かのことを殺すに惜しいと思うのは変だと。ジュナザードは自分の欲望のまま、彼の奥義「転げ回る幽鬼」を太郎に放つた。

しかし、ジュナザードにとって、規格外のことが起きたのはこの先の戦いだった。

—————

「転げ回る幽鬼」ジュナザードの奥義が太郎に向けられたとき、太郎は最後のあがきとして自らのリミッターをはずした。

「静動轟」それは、白浜ケンイチが奥義としていた技の中でもトップクラスに危険な技だった。

それは奥義として不十分な技でもある。

かつて白浜ケンイチだった頃の親友、朝宮龍斗はその技を使い心身に深刻なダメージを負い、長期間にわたる車椅子の生活を余儀なくされた。

静と動の気を同時に解放する「静動轟」は、気の運用の中でも絶対的タブーとされる。少しでも使ってしまうえば激しい気の乱れにより、致命的なダメージを精神ともに受け廃人と化してしまう。

大きすぎるリスクに、短い時間のリターン。おおよそ、通常の武術家なら使うことの

ない技である。

山田太郎自身、ほとんど使ったことのない技であった。しかし、修行を全くしてこなかった弱々しい肉体を、一時的にでもカバールいう可能性があったのは、この技だけであつた。

「死ぬよりはました。」

そう振り切つた者ほど怖いものはない。ある意味の開き直り。まさに手負いの獣である。退路を絶たれ逃げ場を失つた獣は、それこそ死に物狂いで抵抗する。

太郎は自分の死と生の瀬戸際で、無意識に開き直つていた。太郎が晩年、敵無しになる前。若かつた頃はよくこの瀬戸際の感覚を経験したものだつた。

(あつ。これやばいやつだ。)

そう本能的に理解する。

才能のない白浜ケンイチが、達人になるまで生き延びることができたのは、やはりこの開き直りが大きい。どれだけ死にかけても、結局は生き延びている。その事がまさに彼の才能であつたのかもしれない。

彼が最後のあがきに使つた静動轟一は結果として彼の身体能力を飛躍的に増大させた。

パワー、スピード、テクニク、あらゆる能力が太郎の限界を超え、彼を一時的に超

人へと押し上げた。

太郎の白目が黒く染まり、気が高ぶり立つ。これまでの完璧で美しい「静」は消え去り、「静」と「動」の気が混ざり合い、激しく彼を燃え上がらせた。

ジュナザードから技が放たれるまでの一瞬の間の出来事。そのほんの一瞬で太郎は、最強の武術家にまでレベルをあげる。

ジュナザードから放たれる奥義「転げ回る幽鬼」に対し、受けるダメージを最小限度まで下げ、その手に入れたスピードで完璧に近いまでに受け流す。

「なに!?!」

ジュナザードは、少なからず太郎の急な成長に驚く。

太郎の姿は、さつきまでの静かで穏やかな気とはうって変わり、静と動が混ざり合う非常に不安定で荒々しい状態になっていた。

太郎は、飛躍的に底上げされた身体能力により、ほとんどかつての白浜ケンイチだった頃に近い実力になる。

太郎は、ジュナザードの奥義を受け流すと、今までとうってかわり急な反撃へと移り変わる。

彼の腕を正確につかみ上げ、受け身のとれない状態へ体をひねりあげる。

そして、固いアスファルトが数十メートル吹き飛ぶほどの威力でジュナザードを叩きつけた。

ドカーンという音が周りに響きわたり、真つ白い埃が舞う。

しかし、そんな攻撃に太郎は留まるはずもない。太郎は、続けざま追撃を繰り返す。彼は上からジュナザードのいる地面へ急加速する。何十メートルも上から風を切り一瞬のスピードでジュナザードへ近づく。

埃の舞う中、的確に彼の急所へと殴りかかる。

しかし、ジュナザードもやられてばかりではない。先ほどの油断とは打って変わり真剣な態度になる。ふり下ろされる拳をすんでのところで避けると、彼の腹に重い蹴りを繰り出す。

太郎も、もちろんそれを避けきる。そして逆の足でジュナザードの横腹を蹴り飛ばした。

ジュナザードは、すごい勢いで横へととばされる。しかし、太郎の攻撃は分かっていたので、ある程度、攻撃を受け流し、大げさにとばされただけでほとんど無傷であった。

しかし、ここで太郎の身体に限界がくる。太郎は、ジュナザードを蹴り飛ばすやいなや、膝から体が崩れ落ちた。

彼が、静動轟一を使ってからほんの数秒の出来事だった。

YOMI

山田太郎は、何故か闇のメンバーの一員になっていた。闇のメンバーというより、闇のメンバーの候補生という感じである。いわゆるYOMIというグループである。

YOMIとは、闇のメンバーの弟子で構成された弟子育成機関である。

太郎は、YOMI幹部会議に参加し、ひとり首を傾げていた。

(どうしてこんなことになったんだ……)

広く細長い机の前に、YOMIの幹部、いわゆる一影九拳の弟子達が顔をそろえている。

そこには嘗てライバルだった者の姿があった。太郎は最初こそ状況が飲み込めなかったが、嘗て、死んでしまった叶翔、親友だった朝宮龍斗、友達になったものなど、を改めて見、涙ぐましくなった。

嘗て死闘を繰り広げた仲間。考え方こそ違ったが、太郎にとって大事な仲間だった。

だからこそ、太郎は自分がこのグループに入れて良かったとも思っている。もしかしたら、叶翔が助かる未来、朝宮龍斗が健康体でいられる未来があると思うからだ。

リーダーは、叶翔である。今日の会議はそれこそ自分がメインである。新しいYOM Iのメンバーになる太郎を迎え入れるらしい。

太郎は、今日からエンブレム「王」として活動する事になる。

太郎は遺憾であった。何故、もと妻を闇へと追いやった憎きジュナザードの弟子にならなければならぬのか。それでも、仕方がない。逃げられなかったわけだし、ここに所属していると闇の情報も少なからず入ってくるだろう。いいことだらけである。

しかし、太郎は本来の目的である武道家を辞めるということを一ミリも達成できてないことに溜め息を隠せない。やはり、達人になるのは、崖を落ちていくようなものだ。太郎は全身で感じ取る。一度落ちれば、後はもう落ちるだけ。死なない限り留まらないのだ。

メンバーがあらかたそろったようで、会議が始まった。

「新メンバーがいるそうだ。ジュナザード様の弟子らしい。」

太郎はそう紹介され、ペこりと頭を下げる。太郎は一番末端の席にいた。

エンブレム「鋼」ルチャ・リブレの使い手であるレイチエル・スタンレイが太郎をみ、あきれた声で言う。

「陰気くさい奴だね。そのフードうつとおしんだけど。」

派手なパフォーマンスを好む彼女にとって太郎の陰気くさい服装はかんに障るらしい。

太郎は、素顔を見られないように全身真っ黒いフードをかぶり、顔を殆ど覆い隠すマスクをつけていた。

どうして仮面ではないかという問いはいわなくても分かるだろう。

「いいじゃないか。見せられる顔をしてないんじゃない？」

そうリーダーである叶は太郎をからかう。

太郎は、明らかにここで浮いていた。

何を言われても無言でいる太郎に「影」のエンブレムを持つ鍛冶摩 里巳は言う。

「何かしやべればどうだ？ お前ももうYOMIの一員として活動してもらうんだぞ。」

太郎は、何を話せばいいのかと思う。と言うのも、声を出せばみばれる可能性があるが

る。太郎は、YOMIとは別に、せめて学校生活だけは平穩に送りたかったので正体がばれることだけは避けたかった。

また、偽名を使った方がいいだろう。なんて名前にしようか。

太郎は、自分に出せる最大限に低い声で話す。

「へ、平穩だ。戦いは嫌いだ。任務も受けないぞ。よろしく。」

そう話す太郎に、周りのメンバーは不快感を持つ。これまで、死に物狂いで戦い、修

行しこの地位を築いてきたのだ。こんなぼつと出に、さらに新人のくせに先輩の目の前で任務を受けないと豪語するなんて嫌われるに決まっていた。

「随分身勝手な奴が入ってきたもんだな。」

イーサン・スタンレイは腕を組み険しい表情を見せる。彼は、徹底的な任務主義者であつた。

太郎は、完全にミスつたと思つていた。こともあろうか、何故一番はじめの挨拶でこんなことをいつてしまったのか。しかし、任務は受けるつもりは全くなかつた。闇の仕事に荷担するなんて、ろくなことじゃないだろう。出来れば逃げ回りたいなと思つていた。

しかし、よりにもよつてははじめの挨拶で言うべきことではなかつた。完全に嫌われてしまった。

太郎は、ここまで最悪の印象をつけられるのは自分以外にいないだろうと思うのだつた。

それにしても、活人拳の太郎がどうしてYOMIに入れたのだろうか。ある一定の実力があるものが見れば、太郎が闇の性質を持っていないことを察するのは簡単だろう。

しかし、太郎が入れたのは、活人拳か殺人拳かというレベルのところになかつたか

らなのかもしいれない。

戦いたくない。そう太郎は考えていたのである。

もともと、太郎はYOMIに入る必要はなかった。太郎は、肉体的にまだまだであったが、達人と対等に戦える実力は持っている。一影九拳のようなポジションにいてもおかしくはなかったのである。

それでも、彼が一影九拳に選ばれなかったのは「戦いたくない」という根っからの平和主義者だったからである。闇の幹部達は、太郎をYOMIに入れ、闇のメンバーとしての心構えをつけさせようという意図があった。殺すには惜しい人材だった。それもまだ若い年である。いくらでも調教のしがいがあると思っただのかもしれない。

しかし、ジュナザードはその際、そのように決めた幹部に「無駄なことだの」と一蹴している。ジュナザードがどれだけ精神を崩壊させるようしむけても全く折れなかった太郎である。

本郷

秘密情報D。それを盗むことが今回の任務とされる。

太郎と叶は、その情報の入ったUSBファイルがあるとたれ込みのはいった組織のアジトへ向かっていた。

何故俺がこんな任務を受けなくてはならなかったのか。それも叶翔とである。ことの始まりは1週間前。叶翔の師匠である本郷と会った時である。

「君が新しく弟子になった平穩か。」

太郎は、フードを深くかぶり直す。YOMIの会議の後すぐのことだった。たまたま、彼とあうなんてことはない。恐らく太郎に用事があって会いに来たのだ。

「何か御用で？」

太郎は、低い声でそういう。太郎は、警戒していた。

本郷は、グラス越しにじろりと太郎を見る。何か品定めをするような目つきに太郎は

不快感を感じた。

「いや、彼が弟子をとったというものだからどういう者なのか気になってね。」

本郷は、良くも悪くも太郎に興味を持っているようだった。

「……そうですか。」

太郎は、黙って本郷と向かい合う。

太郎はこんな事になって言うのもなんだが、実力を隠すのが得意である。もともと、身体能力が並みの体つきであるし、強者のオーラと言うのも感じられなかったことがないらしい。(by梁山泊)

ジュナザードはなにを思ったのか太郎の実力を勘で感じ取ったみたいだが、普通は気づかれないものである。

太郎は、フードをプラスして被っているわけだし、本郷が興味を持つ要素がないように思われる。ジュナザードの弟子という以外である。

本郷は、なにを思ったのか、とても変なことを言い始めた。

「……。実は、ここ最近忙しくてな。」

彼は、腕を組み上から太郎を見下ろしている。彼の黒いサングラスがきらりと光る。

太郎は、黙って見つめていた。

「君に、頼まれてほしいことがある。」

太郎は、お馴染みの嫌な予感センサーがバリバリ点灯していた。

「な、何でしょう?」

太郎は、フードの中で冷や汗を流す。本郷、彼はサングラスのせいもあり感情が読みにくい。彼は一体自分に何を頼もうとしているのか。

そもそも、太郎でなくてもこんな事があれば恐怖である。組織に入って秒で一影九拳の幹部から頼み事をされるのである。普通、なかなか幹部に会うことさえ出来ないのだ。

太郎には、何かを企んでいるとしか思えなかった。

「ところで君は、かなり派手な自己紹介をしたようだな。」

太郎は、突然の話の展開に動揺する。まさか、幹部の耳にまで届いているとは思っていなかったからである。太郎は、思わず身構えた。

しかし、彼は太郎の自己紹介に悪いイメージを持っていないようだった。

「任務を受けたくないそうだな。」

ギリリと彼のサングラスが光る。

太郎はなんと答えようか迷う。受けたくないと言えば受けなくて良いのだろうか。まさか、そんな単純な話ではあるまい。

「……。」

太郎は、無言で答える。返答を誤るわけにはいかない。太郎は、無言の勝負だと勝手に思う。

「それは、何故だ？」

本郷は、そう太郎に直球で聞く。どうやら太郎を責めても何でもないようである。純粹な疑問なのだろうか。

太郎は、何か引っかけ問題を出されているような気持ちになる。

しかし、彼はジュナザードのように考えを強制するような人間ではないということ。太郎はよく知っていた。質問には誠実に答えるべきだろう。

「俺は、戦いたくない。平穏な生活を送りたいんだ。」

そういうと、本郷は、「ふむ。」と腕を組みながら言う。

酷い空気である。時折訪れる重い沈黙。そして度直球に核心を突いた質問。さらにかつく光る真つ黒のサングラスである。この3拍子はいささか新人にはきついとは思わないだろうか？

本郷は、突然納得したように頷いた。

「……なるほど。」

太郎はびびる。なにが「なるほど。」なのだろうか。さっきの発言に何か納得するような事でもあっただろうか。

予測もつかない会話の応酬に、太郎はなかなかの緊張を覚える。

本郷は、下を向き頷いていたが、突然太郎のほうへ向き直る。その時、本郷のサングラスはまたやはりギリリと光を反射させる。

太郎は固唾をのんだ。

「君は、なかなか私の弟子と気が合いそうにないな。」

「……。」

太郎は、本郷の一挙一動をくまなく観察する。

「君と翔は、全く性格が違うな。」

そういうと本郷は、自分のサングラスをくいつとあげる。

「君に、ぴったりの任務がある。」

本郷は、太郎にそう言う。太郎は、今自分の話を聞いていたかとかちんとくる。先ほど、自分は闇からの任務は受けないと言いつつばかりである。

「君は、戦わなくていい。戦いはうちの翔に任せばいいさ。」

本郷は、そう訳の分からないことを言った。

どうやら本郷は、彼の弟子である叶翔の性格に少し難があると見ているらしい。

彼は、あえて叶翔と全く性格の違う太郎と任務をやらせることで彼の中に何か心境の変化が起きないかと狙っているようだ。

まあ、しかし、本当の目的はジュナザードの弟子である自分がどれほどの實力を持ち、どのような人柄であるのかを見極める為であった。

本郷は、依然と沈黙し見つめる太郎にかまわず任務の詳細を口にし出す。

「あるUSBを盗んできてほしい。」

「USB?」

太郎は、眉を潜める。

「とても、危険な毒ガスの情報が入っている。」

本郷は、腕を組み、さらに言葉が続ける。

「二国を傾けるほどのやばい兵器だ。国の機密機関が組織に情報を盗まれたらしい。」
「どうやら、国の失態が招いた事らしい。こうやって秘密裏に闇のような組織を使つて、国は自国の失態を隠そうとするのだろう。このような処理を秘密裏に受け付けてきたのも闇である。」

「情報は暗号化されている。恐らく、暗号の解読まで進んではいけない。」

太郎は、なるほどと思う。要は、敵に暗号が解読される前に盗まれた情報を処理しなかつたことにしろと言うことだ。

それにしても、弟子クラスがやるのにはかなり重い仕事だと感じた。もとは、本郷自身がいくつもりだったのだろう。それを何を思ったのか太郎に任せてきたのだ。

恐らく、先ほどの反応といい、今先ほど思いついた案なのだろう。

太郎は、ジュナザードといい本郷といい、むちやな要求ばかりしてくる者にうんざりする。俺は、任務をしたくないと言ったばかりである。

しかし、本郷は、太郎に対し言う。

「簡単だ。戦いが嫌なら、敵にばれなければいい。ばれないように盗み出せば戦う必要はないだろう？」

太郎は、そう無表情に、当たり前だと言うように見つめる本郷に、頭が着いていかない。

「暗殺をしてこいとか、敵を壊滅して来いなんていつてるわけではない。」

本郷は、そう続けて言う。まるで太郎にピツタシの任務を見つけてきただろうといっているような雰囲気醸し出している。

どれだけ強くなろうとも、達人になろうとも、やっぱりこの人達の考えにはほとほとついていけないと太郎は思うのだった。

叶翔

「おい。」

「・・・なんでしよう?」

「なんだその格好?今から潜入するんだろ。脱げ!」

アジトから少し離れた場所。太郎は叶翔に叱られていた。何でも、この黒いフードが駄目らしい。あと、マスクも駄目だそうだ。

そんなこといったって、このマントを脱いでしまったら、身ばれする可能性激増である。太郎にとって譲れない部分である。

「でも、俺、これ脱いだら干からびます。」

太郎は、そうボソツと呟く。勿論出任せである。

「そんな訳ないだろ!?!脱げよ!」

「・・・。」

敵の組織はかなりの勢力を持っているようで、警固も固い。こちらは二人しかいないので、戦いになることはできるだけ避けたかった。

そこで、変装し潜入することになったのだが、そうになると、太郎の変装もとけてしま

う。太郎としては、どちらにも潜入しているのと同じことなので、ここで変装をといてしまふのは元も子もないような気がした。

「……わかった。けど、マスクとサングラスだけはつけさせてもらいます。」

太郎は、めちやくちや譲歩してそういつたつもりだったが、叶は全く納得してない様子だった。

「いや、怪しいけど。疑われたら終わりなんだけどな。」

叶は、そろそろ堪忍袋の緒が切れそうだった。

それでも、太郎が全くおれる気配を見せず、このままだと任務に支障がでそうだったので、叶は、しぶしぶマスクとサングラスで許可を出した。

太郎と叶は、スーツに着替え、いかにも社員のように変装する。

スーツは体のライン、筋肉の付き方など、比較的観察しやすい。それは、全身マントに比べてと言うことである。

叶は、着替え終わった太郎を観察する。これまで、戦闘技術に関して全く情報のなかった太郎を知るのに、大きな手掛かりになりそうだった。

叶は、この任務もそうだが、本郷から太郎について調べてくるようにもいわれている。

叶は、太郎の体つきを見、あまりの筋力のなさに驚いた。シラットは柔術のように相手の力を利用するような技ではない。ある程度の鍛え方はしていると思っただ、そうではないことに意外に思う。

「・・・なんですか。」

太郎は、叶の視線を感じそう問う。フードに比べて格段に相手へ伝わる情報量が増える。何か違和感でもあったのだろうかと心配になった。

「いや、思ったよりほっそりとしてるなって思ってたね。」

太郎は、しまったと思う。ジュナザードの弟子なのにこんな体つきではおかしいだろう。しかし、筋力というのは一朝一夕でのびるものではない。ジュナザードの弟子にされ、毎日のように敵を送り込まされ、少しは体力が付いたかもしれないが、まだまだである。流石に誤魔化しようがない。

「弟子になったばかりだから、実力もまだまだなんです。」

叶は、「へー」という風がいい、太郎をじろじろみる。

「まあいいや。時間ももつたいないし、行くか。」

敵のアジトはかなり大きなビルである。およそ20階建ての超高層ビルで、周りの街にとけ込んでいる。表向きは警備関係の会社と装っているが、裏でいろいろ取引を行っ

ているらしい。

本郷の説明にもあったとおり、その会社のある社員が国から機密情報を盗み出した。

国を揺るがすほどの情報らしく、官僚も大慌てしている。とはいえ、情報を盗まれた国はとても小さな国だ。機密情報とは言え、杜撰な管理だったのかもしれない。

「まずは、あの会社の社員がどうやって中に入っているかだね。」

見たところ、i cチップのはいったカードをスキャンしているようだ。思ったより忍び込むのは簡単そうである。

太郎と叶は、社員と思われる人を数人捕まえ、i cチップを拝借した。

そして、ついでに会社の情報も聞き出す。どこに何があるのか。詳しい見取り図や、社内の簡単な情報を喋らせると、気絶させ横たわらせておく。

「なるほど。恐らく例の情報は、このあたりでしょうね。」

簡単に書いてもらった見取り図を元にそこを指し示す。情報処理を管轄している部署である。そこは、他より数倍、警備が堅く、入るにも限られた者しか入れない。i cチップだけでなく指紋認証、顔認証が必要なようだ。

「ある程度のとこまでいったら、武力行使も必要かもね。ここは警備関係の会社だから、油断は出来ないけど。」

すると叶は、太郎を見る。

「君、どのくらい出来るの?」

「出来る・・・とは?」

叶は、苛立ちげに言う。

「どのくらいの強さかってことだよ。知つといたほうがこの先やりやすいだろ。」

太郎は、どう答えようか迷う。流石に、叶より何十年も生きていただけあって、叶よりは十分強いと思っている。しかし、正直に答えても信じてもらえないだろう。それに自分の戦闘姿はあまりばれたくないと思っている。何故なら、ジュナザードの弟子なのにシラットをまだ実践で使いこなせるほど修得してないし、かといってシラット以外の技を使うのはやめた方がいいからだ。

空手などというのももつてのほかである。叶が空手使いであるのに、太郎も空手を使うとおかしいだろう。

「・・・全くの素人です。先ほどもいったとおりジュナザードの弟子になってまもないんです。」

そう答えると、叶は疑いの目を向ける。

「適当なこと言うなよ。任務だからな。」

「ほ、本当ですよ。」

太郎は、どきまぎししながらそう答える。しかし、戦わなくていいならそれに越したことはない。警備会社とはいえ、叶にかなう奴はいないだろう。

もし、危ない奴が出てきたらそのときは助太刀しようと考えていた。

「もし、武力行使になったらお願いしますね。俺、そのうちに情報奪い返してくるんで。」

叶は、面倒な役割を押しつけられうんざりしている。

叶には申し訳ないと思うがこれは好都合だ。それにこの任務、どこか胡散臭さを感じていた。

裏に何かあるな。

こういう小国が絡んでいるきな臭い任務はだいたいろくなことがない。それに他国の警備会社が小国の機密情報を盗むなんてそうそうあるわけがなかった。

太郎はどさくさに紛れて、その機密情報を盗み見ればと企んでいた。

面倒事

俺と叶は変装を済ませた後、奪ったi cチップで無事建物の中に入ることに成功した。恐らく、目的の情報が含まれているUSBは28階、情報処理部にあるはずである。

25階までは、社員なら誰でも出入り可能なようだが、そこから先は限られた者しか入ることが許されていない。25階でエレベーターを乗り換え、所謂、監視チェックの後、その先へのエレベーターへと通される。

俺はこの任務、何か嫌な予感を感じていた。ただの警備会社ならよかつたが、あらかじめきな臭いということは証明されている。ただ、28階まで潜入し、目的のUSBを盗むだけでは済まないような、そんな予感がしていた。

(嫌な予感がする。)

俺の予感は、大体当たることが多い。そしてそれは、いつも最悪の状況で出現する。(何事もなければいいけど。)

俺の胸騒ぎをよそに、25階までは、思った以上に簡単に到着することができた。1階のエレベーターから、そのまま直結でここである。警備が固くなるのもここからだつた。

「おい、油断するなよ。」

叶は、エレベーターの中で、そう言う。叶も何か嫌な予感を感じているようだった。

俺は、エレベーターの中で黒いフードに着替えなおす。もともと、一人の侵入者と見せかけるつもりだった。叶が、注意を引き付けている間、その隙に警備を突破する。

「わかってます。USB見つけたら、何か合図するんで、個別に逃げてくださいね。」

俺は最大限まで気配を消した。普通のものなら気づかれないレベルである。さらに、他人の視線を利用し、死角に入ることですらにその効果は増す。大人だった元白浜ケンイチが開発し、便利に使っていた技である。

「……へー。すごい技だね。ほんと、注意してないと気付かないかも。」

叶は、俺が気配を消したのを見て純粹に驚く。

「……こういうの、得意ですから。」

しかし、いつまでたっても叶の視線は外れない。俺は、じろりと睨み返すと、叶は興味深そうにしている。

「やっぱり、君って結構強かったりするんじゃない？」

叶は、思った以上に見えなくなった俺に、実力の評価を改めているようだった。

「……。」

エレベーターが25階まで着く。開き始めた瞬間、叶はとんでもないスピードで警備のところへ行つたと思うと、そこにいた敵を瞬殺して見せた。

「意外と簡単だね。心配する必要もなかったかも。」

叶は、そう余裕そうに言う。警備を抜け、目的の28階までは一瞬だった。

しかし、予想外のことが起きたのはここからだった。

「・・・ないね。」

一番有力であると思われた、情報処理部。肝心なUSBと思われる代物はどこにもなかった。

「まあ、こんな簡単に終わるわけないよね。どうする？」

「個別で、いいと思います。あるとすれば、見取り図に載っていない、どこか隠し部屋だと思えますね。」

叶は、思った以上に面倒くさくなりそうな案件にため息をついた。それに、今のところ敵が弱すぎて、平穩の実力を測れないでいる。しかし、敵地へ乗り込んだ時の、周囲への気の配り方、立ち回り方、そして、ここまで完璧に気配を断つ平穩を見、相当な実力者ではないかと思いはじめていた。

「そうだね。・・・はー。隠し部屋か。面倒だね。」

叶は、きつちり締めていたネクタイを緩め、肩を回す。

「多分、地下だと思えます。」

俺は、ある程度、隠し部屋の存在に気が付いていた。一階にいた時から、この下に空洞があるということを何となく感じ取っていた。恐らく、この建物のどこかに地下へとつながる通路がある。

俺は、USBの存在について思考を巡らす。

そして、それと同時に敵の気配にも気が付いてしまった。

「……叶さん。来ますよ。」

俺は、最悪の予感が当たっていることに気が付いてしまった。恐らく、特A級。ここまで、俺に存在を悟らせなかったことから、相当な実力者であることがわかる。

俺が、叶にその声をかけて2秒後、唐突として入り口のドア（壁も）破壊された。激しい音を立て、ドアがはじけ飛ぶ。

「……久々の侵入者か。」

現れた男は、およそ2m。金髪で片目が負傷している。放つオーラが、相当な実力者であることを示していた。

「うわ、やばくね?」

叶は、さすがに特A級クラスには、焦りを覚えているようだ。

「闇の者か。ずいぶん若いな。」

俺は、ごくりとつばを飲み込む。闇、梁山泊以外にも特A級がいてもおかしくないが、こんな頻繁に表れていいものではないだろう。恐らく、あのUSBは小国どころではない。どこか、もっと大きな国が関わっている。大国が揺らぐ、相当重要な情報なのだろう。

そうでなければ、特A級クラスを、常時待機させているなんてありえないことだった。「叶さん。ここは俺が引き受けます。USB見つけに行ってください。」

俺は、頭まで深くかぶったフードを脱ぐ。本気を出しても、敵わない相手かもしれない。しかし、それでもまだ可能性があると思えるのは、この男が、戦いという舞台の一线を退いているものだからである。俺は、この男に見覚えがあった。確か過去、一影九拳にいたような気がする。片目が原因で外されて、闇から抜けることになったがそれでも、その実力は確かである。

(・・・厄介すぎる)

俺は、自分の身に降りかかる不幸に嘆いた。超人級の次は特A級である。多少は、鍛えたつもりだが特A級相手に、今の実力でどこまでやれるか。

（もう、最悪叶がUSBを見つけてくるまで耐え忍ぶしかないかも。）

しかし、俺の期待とは裏腹に、叶は俺の戦闘を見学する気満々である。

「へえ。やっぱり、実力隠してたんだ。」

叶は、おもしろくてたまらなさそうな表情をしている。

俺は、うんざりした。面倒ごとが二つも重なるのだ。叶に俺の実力がばれる。さらにこの敵を倒さない限り、危ない奴に兵器が渡ってしまう。俺は、もともとUSBの内容を盗み見、闇より先に先手を打ってやろうと考えていた。だからこそ、この任務は失敗するわけにはいかないのである。

恐らく、本郷はこのことを分かって俺に依頼したのだ。敵を倒しUSBを回収する役目が俺だとしたら、叶の役目は、俺の実力を把握すること。

（やっぱり、今後任務は受けられないことにしよう。）

俺は、ため息をついた。

風林寺美羽

俺は、痛々しく腫れた頬に手を当てながら、うんざりといったような表情で数学の授業を聞いていた。

あれからどうなったのかというと、とりあえずはこうやって無事に授業を受けていることから生還はできているわけだ。しかし、いいか悪いかで言うところと全くよくはない。

全く修行を行ってこなかった太郎にとって、特A級との戦いはかなりきついものだった。ジュナザードとの戦いは、死ぬ気で技を放ったため少しは攻撃ができたが、実際は数分で勝負がつけられていた。それにジュナザードの方も、本気ではなかったのにも関わらずである。

そんな状態の俺が、特A級の達人相手に余裕で勝ち越すことなどできるはずがなかった。本気で特A級の相手と戦って、叶に俺の実力を見られた後、都合よく本郷に助けられた。

恐らくは、ジュナザードの弟子で全く強そうに見えない謎に包まれた俺の実力を確かめるために仕掛けられた任務だったのだろう。本郷は、すでにUSBを確保していたし、遠くから気づかれないように俺を観察していたわけだ。

「やられた」

そのあと、叶はよく俺に話しかけてくるようになったし、俺が戦えるということもY O M I全体に広がり、一応は一目置かれる存在になった。

俺は、ため息をつきながら窓の外を眺めた。今日は恐らく、白浜ケンイチという男にとつて転機となる日になるだろう。昨日は、俺の転機となった日かもしれないが、今日は違う。

何故なら風林寺美羽という転校生が今日学校で紹介されたからである。白浜ケンイチは、前と変わらず遅刻し、先生に黒板けしを投げられ廊下に立たされていた。

「ということは思い出す限り、これから空手部に入り梁山泊の弟子としての道を歩んでいくのだろうか。」

俺は、悲しいような嬉しいような何とも言えない複雑な気持ちになった。本当なら、俺は白浜ケンイチとして梁山泊の一番弟子として武術の道を歩んでいくはずだったのである。

「梁山泊の一番弟子」これは、俺にとって心の支えでもあり誇りだった。

自分からその選択を外したはずなのに、いざ始まってみると胸が締め付けられるような気持になる。

いつのまにか、避け続けてきた武術の道に足を踏み入れているし、梁山泊と敵対している闇に所属している。

自分は、そもそも活人拳、殺人拳という話のレベルにまで達していない。戦いを避け続けている。

その時点で、武術家として失格であるし、梁山泊に顔向けなどできるはずはない。白浜ケンイチとして、どこまでもひたすらに大事なもののために戦い続けてきた「梁山泊の一番弟子」はもう自分の中にはいない。

果てのない戦いの末に、辿り着いた自分は、とてもみじめに思えて仕方がなかった。

昼休み、俺は屋上に出向いた。昨日の傷の包帯を変えするためである。体は普通の人間と同じ、生身の間人であるため前世のように治りが早いわけではない。腹につけられたかなり深手の傷が開き、血が滲み始めていた。

「医者に診てもらわなければならない。」

前世と同じように考えたのが、間違いだった。このくらいなら自分で手当てできるだろうと適当に処置した結果がこれだ。

体のあちこちは痛いし、ぱっくりあいた腹の傷からは血がにじんでいる。

とりあえず上着を脱ぎ、結んでいた包帯を外した。保健室から盗んできた消毒液で軽

く消毒し、また包帯を巻きなおす。

屋上に誰かが登ってくる気配を感じた。

俺は、すぐに近くにあつたTシャツを着て、包帯をポケットに隠す。足音からして、誰がここへ向かっているのか、大体見当がついていた。

ガチャリと扉が開き、風林寺美羽が姿を現す。
振り向いた先で、風林寺美羽と目が合った。

「どうしたんですの。その傷。」

金色の髪に、三つ編みが軽く揺れている。ひどく懐かしい気持ちになった。

「すごく痛そう。」

上着を着て、けがを隠していたつもりだったが、顔の傷だけは隠しきれなかった。

「転校生さんだよね。」

俺は、何事もないようにそう答える。

「どうしていいの？」

風林寺美羽は、俺の方に少し近づいてくる。

「教室にいたときから、その傷気になってたんです。よく見ると、頬だけではなさそうですし。」

彼女は、どうやら俺の傷が気になっていたようだ。うまく隠していたつもりだったが、流石に隠し切れなかったようである。俺は、前世のころを思い出して、懐かしくなった。あの頃も、よく傷を隠して平然とふるまっていたが、どうやっても強がりがばれてしまう。

彼女には、なぜか隠し事がばれてしまう節があった。

白い手が頬の傷に軽く触れる。

かつて好きだった人の高校時代の姿に、俺は動けなくなってしまった。

「ただの傷ではないですよ。誰かからつけられたんですの？」

そう問われ、俺はどきりとした。とつさに彼女から距離をとる。かつて愛した人の若

いころの姿で、自分に話しかけられているということに動揺してしまった。

「あ、これですか。ちよつといざこざに巻き込まれてしまつて。」

「ははは」と平静を取り繕う。彼女に対して、隠し事をするのは、いつだつて苦手だつた。そつと、Tシャツをめくられる。巻きかけの、痛々しい傷が彼女の前であらわになつた。

隠していたはずなのであるのに、どうしてこんなにも簡単にばれてしまうのだろうか。まだ、初対面で、知り合つてもない彼女に、弱みを簡単に握られ、動揺させられてしまふ。

今思えば、初めて会つたあの時だつてそうだった。彼女は、自分の弱いところにすんなり入つてきてしまう。どれだけ年を重ねて強くなつても、彼女の前では無駄なことだった。

「ひどい傷ですわ。どうしてこんな状態で放置してるんですの。というか、こんな状態でよく普通に登校できますわね。」

思つた以上に、ひどいかつた傷を見て彼女は驚いている。

「大したことないですよ。見た目は、痛そうですね、実際は意外と平気ですから。」

そういうと、彼女は怒ったように言う。

「平気なわけじゃないですわ。こんな傷で、痛くないわけじゃないです。上、脱いでくださいですわ。」

巻きかけの包帯を取り、新しく包帯を巻きなおす。

彼女は、こんな状態まで放っておいたことに怒りながら、けがの処置をしていく。

「誰にやられたんですの？」

「……………」

流石に、こたえられるはずもない。黙って答えない自分に、彼女はあきれたような顔を
をする。

「あの、あまり聞かないでもらいたいです。関係ないですよね。」

彼女に対して、こういうことを言える自分に驚いた。彼女に触れられ、うれしいはず

なのに、出てくる言葉は自分の意に反するものばかりだった。

「でも、こんな傷を見て放っておけるはず不是吗。私の知り合いに診てもらおうといいですわ。ちよつとここでは、医療道具も足りないですし」

「いや、大丈夫です。このあと病院に行くはずだったので。」

俺は、とつさにそう？をつく。おそらく梁山泊に連れていかれるのだろう。これまで避け続けてきた梁山泊に、こつとも簡単に連れられてしまうのはかなりの抵抗があった。彼らの姿を見て、普通の精神状態でいられる気はしなかった。

「絶対嘘ですわ。こんな状態まで放っておいて、病院に行くつもりあるわけ無いでのもの。」

「本当に、ちゃんと言きますよ。本当に大丈夫です。」

迷惑そうに、そういうと彼女はしぶしぶ引き下がる。

「本当ですか？明日、確認しますわ。」

俺は、無理やり立ち上がると、彼女を避けるように屋上から逃げ出した。